

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 1 日現在

機関番号：12605

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010～2012

課題番号：22730431

研究課題名（和文） イヌ介在が受刑者の社会復帰教育に及ぼす効果の検証

研究課題名（英文） Verification of the effects of dogs on prisoners as education for their rehabilitation

研究代表者

甲田 菜穂子 (KODA NAOKO)

東京農工大学・大学院農学研究院・准教授

研究者番号：90368415

研究成果の概要（和文）：

知的障害や精神疾患をもつ受刑者に対して、ストレスマネジメントやコミュニケーション訓練の一環として、イヌ介在療法プログラムの実施した。プログラムは、受刑者の心理・社会面に効果があった。そして、医師の診断、対象者の自己評価、ハンドラーによる評価の妥当性が確かめられた。プログラムは、イヌやハンドラーに大きな負担をかけるものではなく、対象者とハンドラーの双方が本プログラムの有効性を評価した。

研究成果の概要（英文）：

A dog-visiting program was conducted for the inmates with mental retardation and/or psychiatric problems as a rehabilitation program for stress management and communication training. The program was psychosocially effective for the inmates. Moreover, the validity of the doctors' diagnosis, the inmates' self-evaluation and the handlers' evaluation was clarified. The program was conducted without much burden on the dogs and their handlers. Both the inmates and the handlers reported the effectiveness of the program.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2012 年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会福祉学

キーワード：障害児・障害者福祉、知的障害、精神障害、受刑者、イヌ、ストレス、コミュニケーション

1. 研究開始当初の背景

現在のような高い再犯率は、犯罪者の更生支援に課題を残すだけでなく、安全・安心な社会を揺るがす。受刑者の社会復帰を阻害する要因の中には、更生教育の不足と情報不足や偏見からくる社会の受け入れ拒否などが

指摘されている。一度、不幸にも道を踏み外してしまったら、容易に社会復帰することができないのである。様々な改善策が提唱されている中で、市民参加型の本研究は、この事態の改善に寄与できる可能性がある。

本研究が分類されるアニマルセラピーと

呼ばれる実践は、人の心身の健康増進、治療、教育などのために、動物を用いて効果をあげようとする試みである。人と動物の親和的な触れ合いが、代替療法や生活の質の向上といった領域で注目され、効果検証もなされてきた。動物との触れ合いには、人の血圧の降下や医療機関への受診回数の減少といった身体的効果、抑うつや自尊心の高揚などの心理的効果、他者との会話の増加や人間関係の改善などの社会的効果が証明されている。

刑務所における動物を用いた社会復帰プログラムは、欧米では職業訓練や社会適応訓練(SST)として取り入れている施設がある。職業訓練では、社会復帰後に動物関連の職業に就けるように動物の飼育や訓練、生産の技能を身につけさせている。また、犯罪に至った原因が受刑者の社会的技能の低さにあると考え、動物との触れ合いによるコミュニケーションスキルの向上やストレスマネジメントを社会適応訓練と捉えている。それらの効果としては、釈放後に動物関連の職業に就く者がいることや、受刑者の攻撃性の減少や自尊心の向上などが挙げられ、他のアニマルセラピーの効果の様相と根本は異ならない。また実践が比較的ある欧米であっても、科学的な取り組みはほとんどなく、訪問型プログラムに関する科学的な報告は皆無に近い。しかし、受刑者更生という困難な取り組みの中では、動物を介在させて少しでも効果を挙げようという試みには魅力がある。

さらに重要なことでは、知的障害者や精神障害者による犯罪は、社会の福祉制度の不備から生じることも多く、健常者と同じ処遇ではあまり更生が望めなかった。近年、受刑者の処遇についての考え方は変化し、法務省は、民間委託による更生教育の理念を打ち出した。知的障害や精神障害を持つ受刑者は、通常の訓練にも乗りにくく、障害に配慮した取り組みが必要である。様々な対応が可能であるイヌを用いたプログラムは、社会復帰に向けた具体的で専門的な訓練に入る前段階の基礎講座として適していると予測される。また、伝統的に動物利用の習慣の少なかった日本人と動物の関係や、刑務所と社会の接点を作る意味からも、訪問型プログラムの有効性は大きいと考えられる。

2. 研究の目的

本研究では、知的障害、精神疾患を持つ受刑者を対象とした日本初の市民参加型の訪問型イヌ介在プログラムを発展させ、社会復帰のための更生教育におけるイヌとの触れ合いが受刑者のストレス、感情やコミュニケーションスキルに与える影響を検証することを目的とした。具体的な調査指標として、毎回の実践セッション前後の対象者の唾液

中のコルチゾル測定、質問紙による気分測定、毎回のセッション後の感想文、ハンドラーによる行動評定を行なった。同時に、実践に参加するイヌやハンドラーへの福祉的配慮として、毎回のセッション前後のイヌの唾液中のコルチゾル測定、行動評定も実施し、過度な負担がかからないようにプログラムをモニタリングすることも目的とした。

3. 研究の方法

知的障害あるいは精神疾患を抱えた男性受刑者に対して更生教育の一環として、イヌを介在した市民主催の訪問型集団活動を下記の手順で8クール実施した。各セッション前後に受刑者に対して、ストレスマネジメントとコミュニケーションスキルに関する心理・社会的効果について質問紙調査と唾液(コルチゾル)測定を行なった。分析では、集団としての効果検証のみならず、プログラムの改良のために、効果の個人差を説明する要因(症状による影響の違いなど)の特定ができるようにした。実践側にも過度の負担をかけない仕組みを取り入れた計画になっていた。

- ・対象者：刑務所入所者 78 名 (知的障害あるいは精神疾患を抱えた男性)。
- ・週 1 回 70 分間/セッション、12 セッションを 1 クールとしたイヌを用いた訪問型触れ合い活動を 8-10 名のグループで 8 クール行なった。各回の実践チームは、イヌとハンドラー 3-7 ペアと講師、コーディネーター、臨床心理士、作業療法士などで構成した。
- ・実践内容は、イヌとの様々な関わり 6 項目を中心に、講義と実習で構成した。同じ項目を 2 週続けて行ない、最初の週は基礎編、次週は前週の復習と発展内容であり、イヌとハンドラーの組も半数以上を入れ替え、効果の定着を確実にした。単にイヌからの癒しを提供するのではなく、更生教育として、イヌとの触れ合いによって対象者の緊張を解き、イヌを含めた他者への配慮や円滑なコミュニケーションを促す技法を各実践に取り入れた。社会復帰後の生活を設計できるような話題も提供した。
- ・対象者への測定：ストレス指標となる唾液からのコルチゾル測定(エンザイムイムノアッセイ法)、質問紙による気分測定を実施し、セッション前後の比較を行なった。自由記述で感想も求め、内容分析を行なった。セッションごとにハンドラーは、活動記録として担当対象者の様子を記録した。
- ・実践側への測定：実践側に過度の負担がかからないように、セッション前後にイヌは唾液からのコルチゾル測定(ラジオイムノアッセイ法)、実践中の行動評定も行なった。ハンドラーは、セッション前後に気分測定を行

ない、ストレスをモニタリングした。

4. 研究成果

対象者は、セッション前と比べて、セッション参加後に「緊張している」、「気分が暗い」、「いらいらしている」、「疲れてやる気が起こらない」、「集中しにくい」、「不安だ」の気分得点に有意な改善がみられた。経時変化では、緊張感と集中力の改善、いらいら感の増加がみられた。対象者の感想文の内容は、セッションに対して総じて肯定的であったが、他者の内面や社会的事象に関する関心度には課題が見られた。ハンドラーは、対象者のイヌと人との相互交渉を肯定的に捉え、そのスキルの経時的な向上を評価した。対象者のコルチゾル値も、セッション前と比べてセッション後に減少し、特に精神疾患者、本人が気分改善を認めた者、ハンドラーに関わり易いと評価された者の減少が顕著であった。つまり、医師の診断、対象者の自己評価、ハンドラーによる評価の妥当性が確かめられ、より効果が見込める対象者の選別にも使える可能性が示唆された。

実践側のモニタリングでは、ハンドラーのストレスは総じて問題がないレベルに収まっており、セッション実践後には、セッション前と比べて、緊張と興奮、爽快感、疲労感、抑うつ感、不安感等の気分改善が認められた。対象者の全般的評価としてハンドラーが関わりやすさを判断するとき、表情を最重視し、次いでイヌの扱い、発話量、イヌへの身体接触の積極性の評価が続いた。ハンドラーのセッション全般に関する評価は、概ね良好であった。ハンドラーは、セッション全般を評価するとき、自分が対象者への対応がうまくできたかどうかを最重視し、次いで、イヌにかかったストレスが軽かったかどうか、ハンドリングがうまくできたかどうかの評価が続いた。ハンドラーは、自身とイヌのセッション中のストレスはあまり重大視しておらず、両者のストレスには関連が認められた。イヌのコルチゾル値は、全体として、セッション前と比べて、セッション後に減少し、ハンドラーにセッション中にストレスがかなりあったと評価されたイヌでも、セッション前後で有意な変化は認められなかった。

本研究により、プログラムの受刑者への心理社会的効果が確かめられた。そして、医師の診断、対象者の自己評価、ハンドラーによる評価の妥当性が確かめられた。プログラムは、ハンドラーやイヌに大きな負担をかけるものではなく、対象者だけでなくハンドラーにとっても効果的であり、対象者とハンドラーの双方が本プログラムの有効性を評価していた。本研究の成果を踏まえ、今後はプログラムを改良し、他の指標を取り入れて新たな効果を検証し、ハンドラーとイヌのユニッ

ト構造の解明も更に進めて行きたいと考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

①甲田菜穂子 「身近な動物との関わりから学べること」 『教育と医学』、査読無(依頼原稿)、697(7)、2011年、86-92.

〔学会発表〕(計3件)

①Koda N. Evaluation of a dog-assisted program by inmates in a specialized unit of a prison and dog handlers. 16th World Congress of the International Society for Criminology, 2011年8月5日, Hyogo, Japan.

②甲田菜穂子・根ヶ山光一 「中年成人のイヌとネコに対する不快感」 日本心理学会第74回大会、2010年9月20日、大阪.

③Koda N., Miyazi Y., Kuniyoshi M., Uehara H., Watanabe G., & Miyazi C. Effects of dog-assisted therapy on the mood of inmates in a specialized unit of a prison and dog handlers. 15th Biennial Scientific Meeting of the International Society for Comparative Psychology, 2010年5月19日, Hyogo, Japan.

〔図書〕(計1件)

①甲田菜穂子 西東社 『飼い犬のココロがわかる 犬の心理』 2010年、191頁.

〔その他〕

監修

①甲田菜穂子・長谷川あや甫 辰巳出版 「コーギーと話そう！」 『コーギースタイル』、30、2012年、12-19.

②甲田菜穂子・長谷川あや甫 辰巳出版 「犬が覚えやすい言葉&発音」 『ダックススタイル』、19、2011年、56-61.

③甲田菜穂子・長谷川あや甫 辰巳出版 「ペチャスマイルは愛嬌が命です」 『PE-CHA』、9、2011年、16-23.

④長谷川あや甫・甲田菜穂子 辰巳出版 「犬と話そう」 『プードルスタイル』、6、2011年、76-83.

⑤甲田菜穂子・長谷川あや甫 辰巳出版 「犬と飼い主は似る！」 『Shi-Ba』、55、2010年、6-15.

⑥甲田菜穂子・長谷川あや甫 辰巳出版 「コーギースマイルの謎」 『コーギースタイル』、30、2012年、12-19.

イル』、25、2010年、22-27.

⑦ 甲田菜穂子・長谷川あや甫 辰巳出版
「柴犬の笑顔」 『Shi-Ba』、52、2010年、
16-20.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

甲田 菜穂子 (KODA NAOKO)

東京農工大学・大学院農学研究院・准教授

研究者番号：90368415